



元博覧会協会事務総長 中村 利雄

あれから10年 愛知万博がもたらしたもの

中村利雄（なかむら としお）

1946年7月、名古屋市生まれ。70年、名大法学部卒後、通産省（現・経産省）入省。95年、大臣官房会計課長、2000年、中小企業庁長官。01年7月、退官。02年9月、博覧会協会副事務総長、03年10月、同事務総長。07年11月から日本商工会議所専務理事。

「自然の叡智」をテーマに二〇〇五年三月から半年間、愛知県長久手と瀬戸の二会場で開催された愛知万博（愛・地球博）開催から今年で一〇年。日本では一九七〇年大阪万博以来、二一世紀最初の一般博（現・登録博）として開かれ国際大交流をコンセプトに一二〇を超える国・地域が参加し、二二〇五万人が訪れた。マンモス、ロボット、リニモ、サツキとメイの家など鮮明な記憶に留める愛知県民もいると思われるが、あれから一〇年。振り返れば何だったのか、何を残したのか……。当時の事務総長で現・日本商工会議所専務理事、中村利雄さん（六十八歳）に聞いた。

——今年、一〇周年記念式典が開催されると聞きました。

中村 三月二十八日に名古屋市中区・名古屋城内の愛知県体育館でパリの博覧会事務局、ロセルタレス事務局長を来賓に迎え、当時の万博協会会長、豊田章一郎さんらにも出席いただき記念式典を行います。むろん関係者やボランティア、NGOなども参加できる思い出的なイベントも企画されます。BIE（博覧会事務局）の話では万博の継承発展を唱え、その運動を続けているのは愛知万博だけだそうです。その一カ月くらい前から民放や関係機関等との共催によるイベントも開催予定です。

——あれから一〇年ですが。
中村 一〇年経っても地元では

鮮明に記憶が残っていると聞きます。それだけ万博が楽しかった、意義があったと評価されていることだと思っています。その時の事業が今に引き継がれていますから。

例えば心臓のけいれんを取り除く器具「AED」の設置とともに医療関係者が待機する救急救命体制は今ではシティーマラソンやどまつりなどのイベントの必置のシステムになっており、各地でも定着しています。また昨年十一月には、名古屋を中心に開催されたESD（持続可能な開発のための教育）国際会議も愛知万博がキックオフの役割を努め、その後関係者の努力があつて開かれることになったものです。持続可能な発展のためには教育が必要ではないか。